

宇宙科学研究所教官公募

公募人員：助教 1名

所属部門：宇宙圏研究系：赤外線天体物理学部門

専門分野：飛翔体を用いた、赤外線の観測による天体物理学の研究、及び飛翔体搭載用観測器の開発研究において指導的な役割を担当する。

同研究系には、現在、高エネルギー天体物理学第1、第2、第3の各部門及び赤外線天体物理学部門があります。

当該分野の科学衛星計画及び共同利用の為の事業を分担し、その遂行に積極的な役割を果たす方を希望します。

尚、当部門の教授には奥田治之が在籍しています。

着任時期：決定後、昭和63年度内のなるべく早い時期。

提出書類：(1)略歴、(2)研究歴、(3)論文リスト及び主要論文別刷、(4)研究計画書(自薦の場合のみ)、(5)推薦書2通(他薦の場合)。又は本人について意見を述べられる人2名の氏名と連絡先(自薦の場合)。

公募締切：昭和63年8月15日 必着

宛先：〒229 神奈川県相模原市由野台 3-1-1

宇宙科学研究所 相模原キャンパス

所長 西村 純

電話 0427-51-3911 (代表)

問い合わせ、及び資料の請求は下記へ願います。

宇宙圏研究系主幹 田中靖郎

その他：選考は宇宙科学研究所運営協議員会議において行います。応募者に適任者がいない場合には、決定を保留することがあります。

封筒の表に「助教公募(または推薦)書類在中」と朱で明記してください。

~~~~~

新刊紹介

~~~~~

日本アマチュア天文学史

日本アマチュア天文学史編纂会編

(恒星社厚生閣発行、B5判、400頁、4800円)

日本天文学会はその発起人会を明治41年(1908年)1月19日に東京天文台で開き、その時の出席者は18名で、寺尾寿台長を座長とし一戸直藏、井上四郎、岡田武松、早乙女清房、田中館愛橋、平山清次、平山信などの諸氏で、第一線の天文学者の名前が連らねられている。この内の井上四郎氏はアマチュア出身の東京天文台職員

であった。そして、この時、本会の目的及び事業が定められた。定款第4条に「本会は、天文学の進歩及び普及することをもって目的とする」と明記してある。

近代天文学が他の学問と異なる点は、多くのアマチュア天文家と共に歩んで来た、ということではなかろうか。現職の天文学者の中、約半数がその前歴にアマチュア時代を持つことによっても、うなづけることと思う。

さて、このような背景をもとに、表記のような書物が、多くの編纂委員及び恒星社厚生閣の努力の結晶として発行された。本書は総説と各論から成り、その時代区分は一応明治以前のいわゆる夜明け前の黎明期から、宇宙への飛躍の第一歩となった人工衛星の打ち上げ直後までとなっている。

総説は、活動の推移が適切な時代区分と共に明快に語られている。

各論は、アマチュア活動の各分野において、現在指導的な立場にある諸氏により、太陽黒点、惑星、日・月食、水・金星日面経過、掩蔽(星食)、流星、流星塵、隕石、彗星、黄道光、変光星・新星、人工衛星、天文計算、天体写真、望遠鏡一鏡面研磨を主として、天文同好会一学校天文部、出版物、天文学史、天文民俗学と続けられている。

1981年2月8日に第1回の編集会議が開かれてより、約8年の年月を要して発行された本書は、執筆により文章にも対応の態度にも差があることは当然としても、登場する方達のアマチュアとしての天文学への執着と共に発行への執念を感じる。この8年の間に、20名の編集委員の中には故人となられた方もある。

したがって、まだまだ多くの歴史的資料が日の目を見ることを望みながら眠っていることであろう。巻末に掲載された人名索引は、日本の近代天文学を築き、現代の天文学を支えている人達のいかに多いかを示すと共に、それぞれの方々の足跡でもであろう。しかし、本書は出版されるべき時期に、出版されるべくして出版された書物というべきであろう。いづれにしても、記録されていなくてはならない内容と、出版されなくてはならない書物が、多くの方々の長い努力の末に、やっと出版され、日の目を見ることになった、という思いを深く持つ書物である。(香西洋樹)

☆ ☆

☆ ☆ ☆